

CONTENTS

「大学教育創造」をめぐって
松永 健二 2

企画、開発・評価部門 4
平成17年度上半期活動報告/下半期活動報告

教育創造部門 6
平成17年度上半期活動報告/下半期活動報告

新任教員研修会を合宿で開催 8

FDフォーラム2005
「高知大学の授業改善～学生からの提言～」 8

自律創造学習成果発表会 9

大学生生活導入教育アンケート集計結果報告 10

あなたはプロフェッショナル・ワーカーに
興味はありますか? 池田 啓実 12

Action ③ 14

Create

高知大学大学教育創造センター





「大学教育創造」をめぐって

理事・副学長（教育担当）

松永 健二

「ないない尽くしの学生論」が大学関係者内だけではなく巷にも氾濫している。

「基礎的な学力がない」「課題（問題）意識がない」「知的好奇心がない」「意欲がない」「大学で何を学ぼうとして入ってきたのか、目標を持っていない」……。挙げればきりがないほどである。

ここで、昨今の学生の現状についてあれこれ議論しようというのではない。ただ、上のような、いわば「嘆きの学生論」から脱却しなければ、前向きな取り組みが生まれてこないのではないかと思うのである。良かれ悪しかれ、教育の受け手（というよりも大学での学びの主体者）である学生たちの現状を真正面から受け止めそれと向き合うことなく、いくら教育改革に取り組んでも、それは絵に描いた餅であり、徒労に終わらざるを得ないということを改めて確認しておきたいのである。ある人は、学生たちは「大学生になるためのプロセス」を大学で行っているのだ、と言う。その支援こそ求められている、と。

この間、本学で開催された「FDフォーラム2005」で問題提起をしてくれた学生が、授業を糸電話になぞらえた。糸電話は糸がピンと張っていないと振動が伝わらないし、聞こえない。授業における教員と学生との関係は糸が纏れている状態だ。纏れをほぐし糸がピンと張るためには双方がその努力をしなければならない、と。教育もコミュニケーションの一つであるとすれば、この糸電話のたとえは言い得て妙である。

問題はどうしたら纏れた糸を解きほぐしピンと張った状態にすることができるかである。個々の教員も各大学も様々な教育改革の取り組みを行ってきたし、行っている。その中で、われわれが学ぶべき優れた成果を上げているところも数多くある。しかし、多くの場合、その取り組みは、従来の土俵に学生を引っ張り込むための工夫だったのではないか。いま必要なことは、新たな大学教育の土俵を学生とともに創造することではないかと思う。

16年度から、「CBI授業」や「自律創造学習」など新たな取り組みが、当センター専任教員と学内のプロジェクトメンバー教員によって実施されている。モデルがないだけに試行錯誤の連続だと思う。大学教育創造センターが担うべき課題は大きい。大げさな言い方になるが、新たな「大学教育文化」を「創造」すること、そしてその成果を全国の大学に発信することを期待している。

create

企画、開発・評価部門 PROJECT/DEVELOPMENT/EVALUATION

REPORT 平成17年度 上半期活動報告

平成17年度教育企画部門と開発・評価部門は、16年度に引き続き合同の専門部会をおき、以下のような課題について取り組みました。アンケート、その他の企画の検討は教育評価プロジェクト、および企画・評価専門部会で検討し、アンケートシステムに関する事項は e-Learning プロジェクトで検討し、原案を作成しました。本年より両プロジェクトメンバーは各学部選出の委員によって構成されるようになりました。

各種アンケート調査について

■ 基礎科目に関するアンケート調査

年度計画に従い、教養教育と専門教育の科目配置に関するアンケート調査を検討、実施するため、学務（教務）委員長、卒業予定者を対象とする基礎科目に関するアンケート調査項目の検討を行いました。また学務（教務）委員長に対する調査を実施しました。

■ 授業評価アンケート、大学教育評価アンケート

学生による授業評価アンケートについて検討し、共通教育委員会および各学部へ提案しました。また、卒業生を対象とする大学の教育評価アンケートの検討を行い、学部へ提出済みです。

■ 新入生意識調査アンケート

新入生の志望動機に関する調査について、昨年に引き続き調査項目の検討を行い、情報教育委員会、情報処理II 担当者の協力を得て実施しました。調査結果について集計し、報告書を作成して各学部および入試機構に資料を添えて提出済みです。

■ フィードバックに関するアンケート

フィードバックの実施を行うため、現状把握のためのアンケート調査を企画し、アンケート項目の検討を行いました。

■ 大学生生活導入教育アンケート

新入生の高校生から大学生への移行を助けるため、導入教育に関するアンケート調査を企画し、実施しました。調査結果については集計、分析し各学部へ提出しました。

■ 五つの能力に関するアンケート

五つの能力に関するアンケート調査の一つとして英語に関するアンケートを作成し、共通教育委員会に提案しました。

成績評価について

■ シラバスの記載内容について

成績評価に関する事項を中心に、シラバスの記載事項について検討を行いました。その結果を電子化シラバス実施委員会に提案し、入力フォームの一部修正をする決定がなされました。

e-Learning システムについて

■ デジタル教材教員アンケート

e-Learning システム充実のための資源を探るため、デジタル教材に関する教員アンケートを行いました。

■ アンケートシステムの検討 (フィードバックシステム、履修登録システム)

アンケートシステムの機能追加について検討しました。

自律創造学習について

■ 課題探求型授業プランの募集

年度計画に基づき、課題探求型授業プランの募集を行いました。1学期に新たな課題探求型授業の実施、授業参観を行い、募集プランの審査に関する検討を行いました。

PLAN 平成17年度 下半期活動報告

各種アンケート調査について

■ 新入生意識調査アンケート

18年度以降のアンケート項目について再検討し、入試機構へ引き継ぎました。

■ 教養教育、基礎教育に関する卒業予定者アンケート

教養教育、基礎教育に関する卒業予定者アンケートを作成し、各学部へ提案しました。

■ 基礎教育に関する学務委員アンケート

基礎教育に関する学務委員アンケートの実施結果を集計、分析し、問題点を検討しました。

■ 5大能力授業評価アンケート

自律創造学習2学期クラスについて、調査の検討を行いました。

e-Learning システムについて

■ アンケートシステムの機能追加

次年度以降の機能追加、LDAP サービスへの対応について検討を行いました。

■ デジタル教材教員アンケート

実施済みのデジタル教材に関する教員アンケート結果について分析し、各学部にフィードバックするとともに e-Learning システムに関するプロジェクトの検討に活用しました。

自律創造学習について

■ 課題探求型授業プランの募集

募集した課題探求型授業プランに対する応募について審査し、優秀企画の採択を行いました。

■ フィードバックシステムに関する調査の検討

厳格な成績評価を実施するために、フィードバックシステムの構築に関する教員、学生を対象としたアンケート調査を行いました。

■ 到達水準や成績評価基準の在り方検討

共通教育委員会主導のもとに行われる、到達水準や成績評価基準の在り方の検討に協力しました。

■ 成績評価に関する FD 活動

成績評価に関する FD 活動の企画を行い、2月に実施しました。

17年度 活動日誌	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月														
大学教育創造センター センター会議 運営委員会	8 センター会議 ①	13 センター会議 ②	25 センター会議 ③	16 センター会議 ④	31 センター会議 ⑤	10 運営委員会 ⑥	28 センター会議 ⑦	27 センター会議 ⑧	3 センター会議 ⑨	22 センター会議 ⑩	30 センター会議 ⑪	16 センター会議 ⑫	26 センター会議 ⑬	30 センター会議 ⑭	17 センター会議 ⑮	21 センター会議 ⑯	28 センター会議 ⑰	12 センター会議 ⑱	10 センター会議 ⑲	20 センター会議 ⑳	7 センター会議 ㉑	13 センター会議 ㉒	20 センター会議 ㉓	22 センター会議 ㉔		
企画・評価専門部会 専門部会 企画・評価専門部会 教育開発 大学教育開発委員会 教育評価 教育開発プロジェクト会議 e-Learning e-Learning プロジェクト会議			8 教育評価 ①	7 e-Learning ①		2 3 新任教員研修	2 教育評価 「合同会議」	4 教育評価 「メール審議」 ①	6 教育評価 「メール審議」 ②	10 専門部会 ①	17 e-Learning ②	21 教育開発 ②	30 FDフォーラム 2005		13 教育評価 ③											7 e-Learning ③



平成17年度 上半期活動報告

■「自律創造学習」の進展

平成16年度後期から、大学教育創造センター開講科目としてスタートした「自律創造学習」は、17年度に入って質・量ともに大きく発展しました。

平成17年度前期に、「自律創造学習」を週2コマ開講し、一方を「テーマ指定（環境問題）」、他方を「テーマ自由」としてみたところ、それぞれに30人を超える履修希望者が集まりました。これは、昨年の4倍の人数です。この2クラスは、1学期の最終授業終了後の土曜日に、合同成果発表会を開催、学外審査員もお迎えして、盛大なプレゼンテーション・コンクールとなりました。また、7月には学生達の自主企画による、「自律創造合宿」「バーベキュー・パーティー」「徹夜討論会」などが実施されて、名実ともに自律的なコミュニケーション学習が展開されました。

このような、学生の積極性に後押しされて、2学期から新規に開講する計画だった「自律創造学習II」への展望が、スムーズに開けました。

■「CBI授業」2年目の展開

文部科学省の「現代GP」として採択された「CBI授業」は2年目に入りました。

「CBI授業」を取り入れた成果や今後の課題等については、本誌12ページの「あなたはプロフェッショナル・ワーカーに興味はありますか？」に譲ります。

■高大連携プロジェクト

高知大学と地元の高등학교が連携して、新たな教育プログラムを開発する「高大連携」が動き始めました。

平成17年4月から県立丸の内高校と県立大方高校の現役教員が、それぞれ1人ずつ、高知大学 大学教育創造センターに派遣され、創造的な教育活動の研修を展開しておられます。丸の内高校の校長先生には、7月に実施された自律創造学習合同成果発表会の審査員として参加していただきましたし、大方高校とは平成17年度後期に、本学との共同プログラムなどが企画されています。



平成17年度 下半期活動報告

■「自律創造学習II」の開講

2学期から新たに、「自律創造学習II」を開講しました。従来の自律創造学習を履修した者で、更に高いレベルの内容を追求したい学生を対象としたものです。

従来の自律創造学習を履修した学生の反応は、大別すると「達成感があり満足できた」と「予習・復習やグループ・メンバーとの共同作業が辛かった」というものとの二つに分けられます。前者の感想を持った学生のうち、特に積極的な10名が、「高校生への働きかけ」「地域おこし」「日中学生交流」の3テーマのもと、「自律創造学習II」に取り組みました。

2学期の（従来型）自律創造学習を受講している8チームの学生と、自律創造学習IIの3チームとが、平成18年1月28日（土）、最終の合同成果発表会で競い合いました。

■CBI授業システム協働開発委員会

11月26日「第1回CBI授業システム協働開発委員会」が開催され、学外委員22名と学内委員20名が参加しました。会議では、2004年度のCBI授業実施概要と、2005年度の間接報告が発表され、活発な意見交換が行われました。また、3月25日には「第2回CBI授業システム協働開発委員会」が開催されます。2006年度以降は、文部科学省からの競争的資金の交付はなくなりますが、高知大学独自の取り組みとして引き続きCBI授業が展開されます。

■自律創造学習とFDとの結合

11月30日に「FDフォーラム2005」が開催されました（詳細別項）が、今回のFDは、自律創造学習を履修した学生有志と大学教育創造センター教員とが、企画段階から実施までを一緒に行いました。本学初の試みでしたが、自律創造学習の発展型として特筆されるものです。

■組織改編

平成18年度からは、センター等の全面的組織改編が計画されていますので、当センターもその改編への対応を検討しました。

17年度 活動日誌	4月	7月	11月	1月	2月	3月
教育創造専門部会	13 「自律創造型学習法」 開発プロジェクト会議①	27 高大連携教育、 「自律創造型学習法」 開発プロジェクト 合同会議 ①	26 CBI授業システム 協働開発委員会 ①	28 自律創造学習成果 発表会	18 高校生プレゼンフェスタ 19 プレゼンフェスタ2006 22 教育創造専門部会	25 CBI授業システム 協働開発委員会 ②

❁ 新任教員研修会を合宿で開催

2005年9月2日(金)午後から、翌日の午前まで、新任教員FDを市内のホテルにおいて合宿形式で実施しました。これは高知大学として初の試みです。2005年度に新規採用された教員14名が参加して、深夜まで熱のこもった議論が交わされました。

プログラムの概要は右の通りです。



最近のFDで参加者から必ず指摘されることですが、「グループ討議」に最も熱が入り、得るものが多いようです。特に今回は合宿のため、じっくりと長時間話し合えたことに、高い満足度が示されました。

プログラム

9月2日(金)

- 13:30 開会
- 13:40 講話
「高知大学への眼差し」
高知新聞社 柳原 聖司 氏
- 14:10 講話
「大学を巡る状況と私達の課題」
高知大学副学長 松永 健二 氏
- 15:00 グループ討議
「今、高知大学の教育と教員に
求められているもの」
- 19:00 講話
「今、学生の心は…支援のヒントを探る」
保健管理センター助教授 北添 紀子 氏
- 21:00 意見交換会

9月3日(土)

- 10:00 グループ討議の報告・質疑応答
- 12:00 閉会

❁ FDフォーラム2005 「高知大学の授業改善～学生からの提言～」

2005年11月30日(水)、教職員と学生が参加し、「授業改善」をテーマに意見交換を行うという初めての試みのFDフォーラムが開催されました。

このFDは、大学教育創造センター教員と学生たちによる合同の実行委員会を組織し、その企画段階から学生の意見が採り入れられました。事前のPRと準備不足のため、教職員、学生共にフォーラムの参加者は少なかったのですが、活発な意見交換が行われ、参加者からは次年度以降も是非開催してほしいという感想が多く寄せられました。



パネルディスカッション



フリーディスカッション

開催場所：朝倉地区 共通教育棟2号館222教室
岡豊地区 (臨床講義棟第1講義室)
物部地区 (合併講義棟5-1教室)
※遠隔講義システムを利用

日時：2005年11月30日(水) 13:30～15:30

プログラム

- 13:30 開会挨拶 松永 健二 副学長
- 13:35 「学生による授業評価アンケート(共通教育)について」
大石 達良 (人文学部教員)
「理学部の授業等アンケートについて」
加藤 和久 (理学部教員)
- 14:00 学生からの問題提起
「先生の声(きもち)は学生に届いているのか」
後藤 円哉 (教育学部学生)
- 14:20 パネルディスカッション
論題「学生中心の、良い授業とは？」
パネリスト 篠 和夫 (農学部教員)
中澤 純治 (人文学部教員)
川野 佑 (教育学部学生)
及川 理沙 (人文学部学生)
- 15:15 参加者全員によるフリーディスカッション
- 15:30 閉会挨拶 辻田 宏 大学教育創造センター長

❁ 自律創造学習成果発表会

平成18年1月28日(土)に「自律創造学習」「自律創造学習II」の受講生による授業成果発表会が開催されました。発表会は、受講生スタッフの運営で行い、11グループに分かれ、それぞれにテーマを設定してプレゼンテーション形式で行われました。

学外識者の審査員も迎え、厳しい中にも温かいコメントを受け、自信を深める者、準備不足を嘆く者など悲喜交々の発表会となりました。



自律創造学習成果発表会のご案内

日時：2006年1月28日(土)
10:00～16:00(講評・表彰式含む)
(発表・午前の部:10時～12時 午後の部:13時～14時40分)

場所：高知大学メディアホール
朝倉キャンパス「メディアの森」6階(大学正門に入って、左斜め前方)

発表テーマ(発表チーム)

- 1.「楽しめる占いを作るー心理テスト/診断テストー」(大きな空の下で)
- 2.「方言から見出せる県民性」(高橋ユニオンズ)
- 3.「引きずっている恋愛を克服する」(LOVE100%)
- 4.「等身大アンパンマンを作る」(ネヴァーランドの子供たち)
- 5.「Life is Music」(アイダホ)
- 6.「高知大生の生活について」(テクニカルファール)
..... 昼食
- 7.「夢を追う人と追わない人」(行き当たりばったり)
- 8.「友達とは何か?」(トライ)
- 9.「高校教育のサポート」(七等星)
- 10.「草の根からの日中友好」(カンカンとランラン)
- 11.「朝倉まちづくり計画」(START!)

審査員

高知県立大方高校校長 松原 和廣 氏
武蔵野大学教授 北森 義明 氏
学びリサーチ&マーケティング 湊 孝司 氏
高知大学副学長 松永 健二 氏
高知大学農学部教授 篠 和夫 氏

高知大学『大学教育創造センター』では、学生と社会の期待に応える新しい大学教育の創造・開発活動に取り組んでいます。その一環として、同センターでは2004年度2学期から教養科目『自律創造学習』を開講しています。その詳細は、高知大学『大学教育創造センター』のホームページ (<http://www.kochi-u.ac.jp/JA/daikyo/>) でご覧いただけますが、ひとこと言いますと、グループワークを駆使しながら、学生自らが学習課題を設定し、自らがその課題解決策(方法)の企画・立案と実践を行うものです。

2005年度2学期からは、「自律創造学習II」が追加開設されました。この「自律創造学習II」は、1学期の「自律創造学習」の履修者に限定して、さらに深く学びたい学生向けに新設されたもので、社会的課題の設定とその実践的解決を必須とするものです。

2005年度2学期には、「自律創造学習」が8チーム、「自律創造学習II」が3チーム結成されて、課題設定・解決策立案・実践・発表といったグループ・ワークを繰り返しながら学習を進めてきました。このたび開催される成果発表会はその集大成として、チーム毎にプレゼンテーションを行い、グループ学習の成果を競うものです。

つきましては、この新しい授業に興味のある学生諸君や教員、高校生・市民の皆様にもぜひ御参観いただきたく、ご案内する次第です。出入り自由ですので、ご都合のつく時間帯にいつでもご入場ください。

大学生活導入教育 アンケート集計結果報告

はじめに

本アンケートはオリエンテーションや「大学学」などの導入教育を通じて、新入生の大学生活への移行の助けが十分に行われているかなど、導入プログラムの実態や問題点を明らかにし、プログラムの改善に役立てることを目的に行ったものです。全国的な傾向として、学生の意向に関する問題は取り組みが急がれる課題のようです。

本調査は6月初旬から中旬にかけて1年生必修の「情報処理II」の授業で担当教員の皆様のご協力をいただき、Webアンケートシステムを使って実施しました。本来は5月初旬、GW明けの実施を予定しておりましたが、作業に一部時間がかかったため少し遅くなりました。回答率は最も低い数理情報科学科で40%、50%台が農学部で2学科、60%台が4学科、残りは80%以上でスポーツ科学コースは100%でした。

大学生活に対して思い描いているイメージ

新入生の多くは、「勉強を中心にするつもりだが、学生生活や学生としての活動も楽しみたい」と思っているようです。また、「専門的に高度な知識や資格」に興味、関心のある学生は少なく、「幅広い知識」の獲得を目標としている学生が多いようです。

「勉強」に対しては、「板書をノートに取る事」ではなく、「理解すること」というイメージを持っている事が分かりました。また、「単位は1、2年のうちにたくさん取っておく」方がよいと思っているようです。さらに「クラブ活動」や「ボランティア活動」が就職に有利に働くと思っている学生も多い傾向がありました。

新入生オリエンテーションや「大学学」の授業、 その他の授業を通じての感想

おそらく新入生オリエンテーションで説明された内容が主だと思われそうですが、その内容のうち、教育理念の説明や所属学科の学習内容、研究内容についてはおおむね理解されているようです。ただし自由記述欄を見ますと、難しかった、分からなかった、ゆっくり説明してほしいなどの記述が目立っており、工夫の余地があるようです。

さらに自由記述欄からは教員の説明や履修案内、便覧の記述よりも、上級生の影響が大きいことが伺えます。大学の認証する学生ボランティアを組織して、導入教育のサポートをすることも効果的でしょう。

履修方法の説明はよく理解できているようです。その一方で、2年次以降の学習の進め方や分属の方法、研究室配属の方法などには説明不足のところが多いようです。

集計結果からは「単位制」について、充分理解できているように思われました。ところが自由記述欄を見ますと、必ずしもそうではないようです。どれだけの学習時間に対して何単位得られるという「単位制」ではなく、「要卒単位」や「必須、選択の単位」、「履修登録の上限」などを「単位制」と理解したようです。これについては設問の改良が必要です。

実際に大学での授業を受けてみて、高校と大学の「勉強」の違いを感じているか尋ねたところ、「感じる」との回答が突出して高かったのは社会経済学科で、どのような取り組みをしているか参考になる場所でしょう。一方、理学部、農学部では低い傾向がありました。理系学部では専門教育の性質上、知識の獲得に重心をおいた授業が多い事がこの結果に結びついた可能性があります。

大学では課題としてレポートを書かせる事がよくあり、

この点が高校までと大きく違って感じられるところでしょう。実際授業でレポートは課せられているものの、その書き方については適切な指導がなく、困っている様子がうかがえました。多くの学科で「日本語技法」を通じてレポートの書き方なども指導する事と思いますが、専門外の授業も受ける共通教育科目では、日本語技法の受講をまったとしても必ずしもレポートが書けるようになるわけではないでしょう。レポートを課す場合の指導のあり方についても検討が必要です。

授業が高校までと違っていると実感している学生は多いようです。また、一部の学科では30%もの学生が「高校までとずいぶん違って戸惑っている」と回答しており、この回答者の中には今後のメンタルケアが必要になるケースもあるかもしれませんから、注意が必要です。

以上に示してきた通り、オリエンテーション等での教育内容や課程に関する説明は比較的良く理解されているようですが、レポートの書き方や、大学での授業の受け方などは導入教育のメニューとして充実させる必要がありそうです。

アドバイザー教員制度について

アドバイザー制度はおおむね理解されているようです。特に理学部では「充分理解できた」の回答率が80%を超えており、どのようにアナウンスされているかおおいに参考となる場所でしょう。一方、アドバイザー制度は利用しやすいとは感じられていないようです。キャンパスが離れている農学部特有の問題もあり、また「何を何処に相談に行ったら良いか分からない」学生も少なくない事から、総合的な相談窓口として学生サポート窓口のようなものが今後、必要になるかもしれません。

ハラスメントの説明について尋ねたところ、セクハラ認知度は高い事が分かりました。それに比べるとアカハラやスモークハラスメントの認知度は低い傾向がありました。ただし自由記述欄には各学科とも、回答率とは無関係に「聞いたことがない」などの記述が見られ、これらの認知度が本当に導入教育で理解したものなのか、疑問の残るところもありました。ハラスメント行為そのものが人権侵害であり、セクハラだけをピンポイントで撲滅することが難しいことから、多面的な人権教育を大学学などの導入教育に取り入れていく工夫が必要ではないでしょうか。

大学生活で身に付けたい能力 (高知大学の教育が目指す五つの能力)

高知大学の目指す五つの能力について、それを身に付けたいと思うか尋ねました。その結果、多くの新入生が五つの能力を身に付けたいと思っている事が分かりました。特に情報活用能力については高い傾向が見られます。一方で異文化理解能力についてはその割合が低く、導入教育や英語教育を通じて、高知大学がなぜこの能力の養成に力を入れているか理解してもらう必要があるようです。

また、「大学生になったら本人のやる気次第」ということが「充分実感できた」という回答率が非常に高く出ていました。

終わりに

「大学学」の授業も終わり、導入教育はそのメニューがほぼ終了していますが、多くの新入生はまだ4月のオリエンテーションを受けた時期からほとんど抱えている問題に変化が無いようです。当初、「大学学」はまさに導入教育の部分を担当科目として開設されたのではなかったでしょうか。今回の調査結果をもとに、今一度、内容等の検討をしてみたいかがでしょうか。また、オリエンテーションの内容についても検討をし、「大学学」との連携やすみ分けなど、トータルでの導入教育の完成を目指す必要があるでしょう。

全国的にも全入時代の到来を（一部既に）迎え、高校生から大学生への移行の問題が深刻になっています。この問題への対応を導入教育によってうまくしないと、留年、退学率の増加や就職率の低下に結びつき、ニートの養成にもつながる深刻な問題に発展しかねないと考えられます。

あなたはプロフェッショナル・ワーカーに興味はありますか？

池田 啓実 (CBI 授業システム開発プロジェクト統括/人文学部教授)

「CBI (シー・ビー・アイ: Collaboration based Internship)」というものをご存じでしょうか？

本稿では、高知大学内ではまだまだ認知されたとはいえませんが、世間では結構評判になっているこのCBIについてお話ししたいと思います。CBIは、ざっくり言えば、高知大学が開発した長期実践型インターンシップです。でも、ただの長期実践ではなく、協働 (Collaboration) を基本としているところに大きな特長があります。では、何故、今、インターンシップなのでしょう。長期実践かつ協働型なのでしょう。この問いを考える参考に、田坂広志氏 (多摩大学大学院教授・(株)ソフィアバンク代表) が論じる「21世紀の大学—3つの進化」の考え方を簡単にまずは紹介してみたいと思います。

21世紀の大学教育の使命はプロフェッショナル・ワーカーの育成

田坂氏は、20世紀と21世紀では大学教育に求められる質が大きく変わると指摘します。「専門的な知識」を身につけたナレッジ・ワーカーの育成が使命であった20世紀の大学教育が、21世紀には、「職業的な智慧」を身につけたプロフェッショナルの育成へとその使命が進化するということです。

では「専門的な知識」と「職業的な智慧」の違いは何か。「言葉で表せる知識」と「言葉で表せない智慧」と言い換えると分かりやすいかもしれません。智慧は、「技術 (スキル、センス、テクニック、ノウハウ)」と「心得 (マインド、ハート、スピリット、パーソナリティ)」の合成体です。つまり、智慧は、専門的な知識を他者の幸福のために使用できる状態に変換する能力と言ってもいいかもしれません。21世紀社会で活躍できる人材は、「職業的な智慧」で仕事をする「プロフェッショナル」だというのが田坂氏の主張なのです。

彼は、プロフェッショナルを目指すには、2つの能力を習得する必要がありますと言います。

「職業的な智慧」と「智慧の修得法」です。前者はすでに説明したように、技術と心得です。技術は、職業人としての成長、心得は人間としての成長でもあるとのこと。「智慧の修得法」とは、「人間から学ぶ力 (私淑力と傾聴力)」と「経験から学ぶ

力 (反省力と感得力)」とからなると言います。2つの能力の習得を可能にすること、それがプロフェッショナル・ユニバーシティへ進化することに他ならないわけです。

この進化は、(a) 実社会のプロフェッショナルが大学で教える、(b) 学生が実社会の職場での体験を通じて学ぶ、(c) 大学内にプロフェッショナルリズムを徹底することで実現すると言います。項目 (a) は学外講師を招いた授業。項目 (b) はまさにインターンシップそのものです。(c) については、これからの課題と言えるでしょう。

「職業的な智慧」と長期実践かつ協働型インターンシップ

プロフェッショナル・ワーカーに必要な「職業的な智慧」、それは「言葉で表せないモノ」ですから、これを講義室で伝授することは基本的には困難です。学ぶ者が実社会に向かかなければ習得できない能力、それが「職業的な智慧」です。プロフェッショナル・ワーカーになるためには、いかなる方法でも良いから実社会に身を置く、この行動が大変重要になります。

言葉で表せない智慧を実社会から習得するとき、学生たちはどうするでしょう。

インターンシップの活用？ それともアルバイト？ どちらのケースでも、絶対に必要な要素があります。それは「真剣」にその実社会と関わりを持つことができているかどうかです。学生が「真剣」でないとき、忙しいプロフェッショナルな社会人が「真剣」に関わりを持ってくれるのでしょうか。「人間から学ぶ力」と「経験から学ぶ力」はともに、学び手と社会人の双方が「真剣」であって初めて習得できる力だということです。

冒頭に、CBIは長期実践かつ協働型のインターンシップだと述べました。我々が目指したことは、学生と受入企業・組織が「真剣」になる仕組みづくりでした。ほんの小さな経験から得たヒントでしたが、それを大きな仕組みとしてシステム化したのが、CBIだったわけです。そのために、最短でも1か月、最長は4か月までの実習期間 (2年の1学期) としました。もちろん、1か月 (実働20日) で2単位 (教養科目の社会系) が認定されるという、正課の授業としました。CBI実習だけで最大8単位となります。また、「真剣」なインターンシップとするためには、インターン生が受入企業等できちんと働くことが可能な

状態になければなりません。1年生の2学期に開講するCBI企画立案 (2単位) がその役割を担う授業です。ただし、実習しただけでは「職業的な智慧」と「智慧の修得法」を習得することはできません。実践を振り返り、経験を能力に転換することが必要です。これを担うのが、CBI自己分析 (2単位) の授業です。(下図参照)

インターン生はどのように変わったか

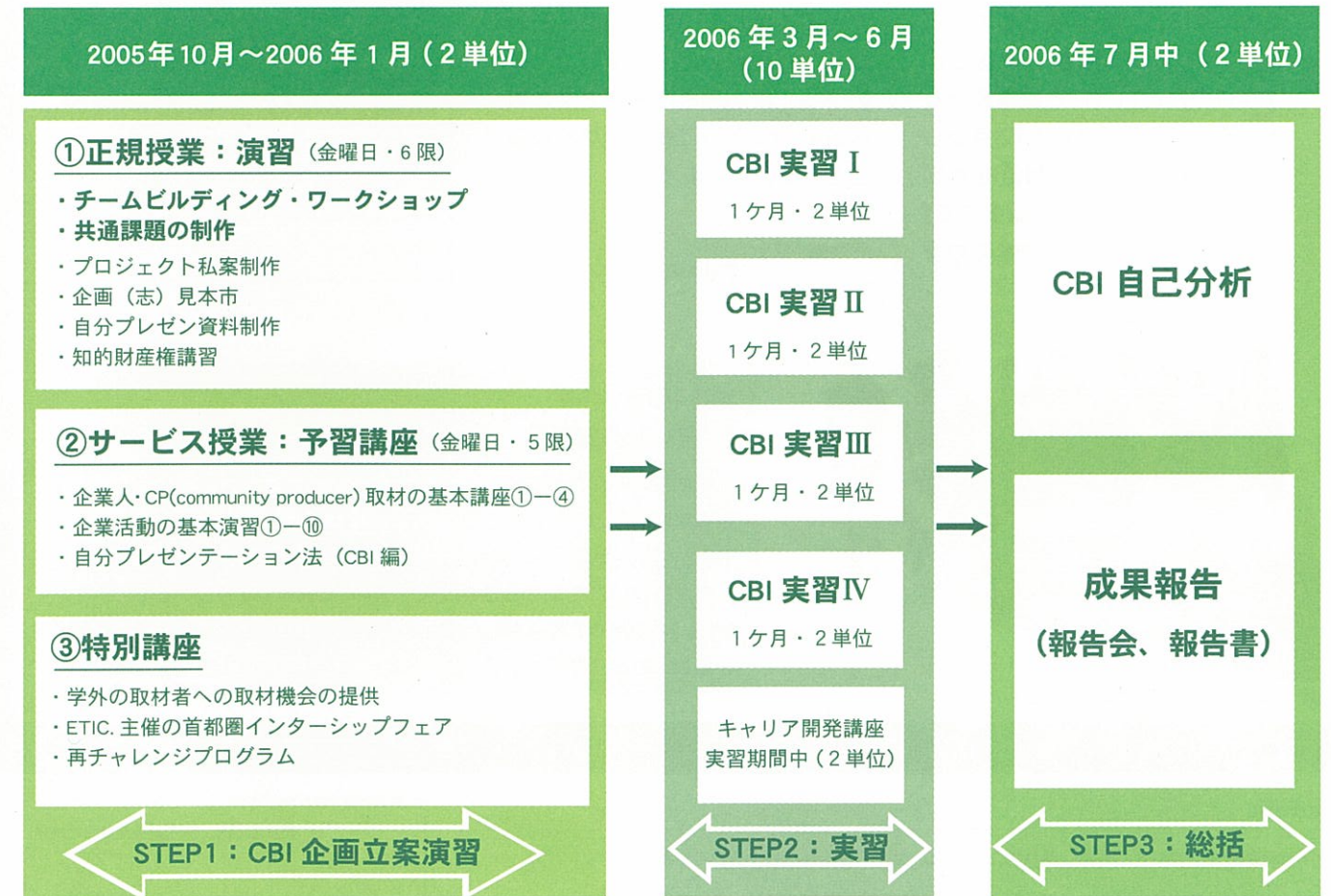
プロフェッショナル・ワーカーは、20世紀社会では活躍できたナレッジ・ワーカーが進化したものです。「専門的な知識」の習得、それはプロフェッショナル・ワーカーには当たり前のことでしかありませんが、その質の高さが求められることにも気がつけなければなりません。智慧を提供する対象が、多様な価値観を持つからです。知識の習得 (定着学習) の質が悪いと大変厳しいのです。質の悪い定着学習となるのは、知識を活用する目的がない時だと言われます。学んだ知識が連鎖もなく単純に記憶することとどまるので、試験 (記憶する目的) が終了すると同時に、記憶した知識は跡形もなく消えていくのです。

CBIタイプのインターンシップは、「職業的な智慧」と「智慧

の修得法」を学ぶためのものです。長期実践かつ協働型のインターンシップは、学んだ専門的な知識をどのように活用すれば、社会の幸福に役立つのか、それを見るための機会でもあるのです。少し難しい表現を使えば、「知識を活用するための指針 (ヒューリスティック)」の習得ということになります。これを習得でき始めると、学びの姿勢に大きな変化が表れます。どのような授業でも、何かのときに役立つかもしれないと思える、以前なら理解が困難な理論も、CBI実践の経験に照らし合わせながら聞くことで、理論の意味するところが手に取るように分かる、などの変化です。たとえ、講義のような知識の伝授が基本の講義であっても、そこに自ら意義を見いだそうとするわけです。

仕事の捉え方にも大きな変化が表れています。最大の変化は、チームワークの重要性、チームとしての仕事に優劣はないという認識が形成されたことでしょう。

大学教育創造センター (18年度からは、総合教育センター・大学教育創造部門) では、18年度開講授業として、「CBI授業」のほかに、「自律協働入門」、「自律創造学習I,II」、「学びを創る」などを計画し、「考え、表現し、行動する」ことを目標にした学生たちを支援していきたいと考えています



Action 3

学生たちが自主的に行ったクリエイティブな活動の紹介



ロゴマークです



隊員たちです。いい顔してます

高知子ども守り隊 ～守るんジャー～ Safe Kochi for Children

平成 17 年 11 月 22 日には広島県で小学 1 年生の女兒が殺害され、同 12 月 2 日には栃木県で小学 1 年生の女兒が殺害されました。被害者の家族や友人など、関係者の悲しみは計り知ることができないほど大きなものだと思います。それと同時に、繰り返される悲劇に不安を感じる人も数多くいるはずだ。

私たちは、このような事件が起こったことに非常に大きな衝撃を受け、すぐに、大学生として子どもたちのために何かできることはないのかということを考えました。そして、平成 17 年 12 月から「下校時間帯に通学路付近を巡回し、子どもたちの安全を確保する」というボランティア活動を始めました。

学校、地域、警察の方々と連携して通学路付近の危険箇所を割り出し、そこに私たちが立ち、またはその付近を巡回し、子どもたちを犯罪や事故から守っています。私たちは「Safe Kochi for children」—「安全な高知を、子どもたちのために」を合言葉に、活動を進めています。守るんジャーの活動が少しでも学校・地域・家庭の役に立つこと、守るんジャーの活動によって子どもたちが安心して下校できると感じてくれること、それが私たちの願いです。そして、高知から、日本から、子どもたちが被害に遭うという事件がなくなることを望んでいます。

※ mamo = 守るんジャー
…隊員たちの守るんジャーの呼び方

mamo の現在

隊員：95 名（教育学部 1～4 年生）

■活動内容

校区を巡回したり、交通整備をしたり、子どもとお話をしたり、清掃活動をしたりしています。

■地域との連携

地域の方々と話し合いにも参加し、活動に協力していただいています。

地域あつての私たちの活動！受け入れてくださり本当に感謝しています。

■地域の方々から

「mamoのおかげで朝倉が明るくなった」とお褒めのお言葉が。

■他県との交流

現在 mamo は 6 府県に広がっています。高知大発祥のこの活動がもっと多くの方々に広がり、防犯に対する意識が高まればと思います。

■今後の課題

子どもを守ることを第一に考え、どのようにすればよりよいかを常に明確に持ち続けること。地域交流が犯罪の抑止に使われると考え、具体的にどう活動を展開していくか。息の長い活動にするために、宣伝活動の充実をどのようにするか。

HP アドレス：<http://skfc.que.jp/>



親子スタンプラリーに参加しました！

守るんジャー代表

学校教育教員養成課程 4 年生 阪野 史裕

mamo は非常に積極的な組織だ。隊員は教師を志す教育学部が主である。学校・地域・家庭を学生のうちから見ることは大きい。そのために様々なことを語

れないのが悔しいくらいだ。詳しくは HP を見て欲しい。しかし、これだけは覚えて欲しい。私たちは mamo を誇りに思っている。そして全ての地域住民に感謝の気持ちを忘れていないということ。

編集後記

大学教育創造センターとしては、最後のニュースレター。これからもよろしくお願ひします。(つ)最近、大学生活の中におけるクラブ活動や寮生活が持つ教育効果に注目しています。(是)センターの活動は多岐にわたり、考えながら走りまたあるときは考える暇なく走り続けた 1 年でした。(A)この 1 年、あつという間でした。各部会等担当の先生方ご苦労さまでした(松)来年度はレベルアップした中身の濃い仕事ができるように頑張りたいものです。(末)

表紙の写真：新任教員研修会の様子。

Create

Published March 2006
平成 18 年 3 月発行

発行者 高知大学教育創造センター
〒780-8520 高知市曙町 2 丁目 5 番 1 号
TEL (088) 844-8652